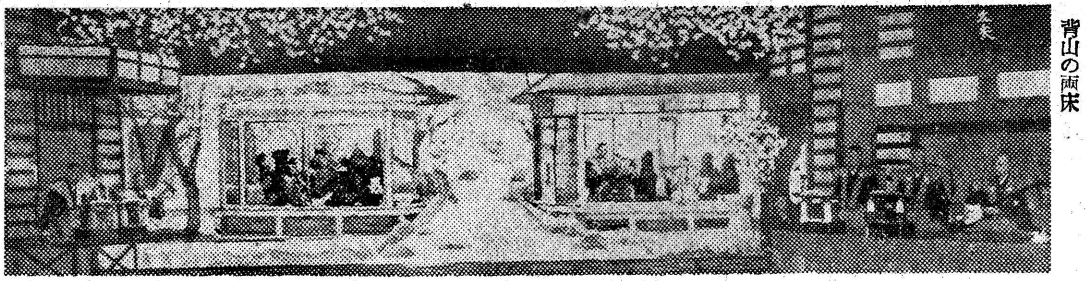
義太夫隨喜の一篇

文樂座より中継

津、古靭兩太夫が「掛合で熱演」

妹背山婦女庭訓

（自七時半 至九時半）



山の段の場景＝櫻花滿開の吉野川を挾んで妹山背山の両床

竹本 津太夫さん

豊竹 古靭太夫さん

豊竹つばめ太夫さん

「妹背山婦女庭訓」は明和八年正月に書卸されたもので作者は近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南で三好松洛が後見となつてゐる。全五段から成立つてゐるがこんどの「山の段」は俗度三段目の切で結構の雄大絶倫の奇妙、章句の優艶な點に於ては淨曲中隨一である。出演者メンバーは所謂紋下問題の解決を機として津、古靭兩師の握手的熱演で稀に見る豪華な顔觸れであることは秋の一夜の聽き洩せないものである

大判事　竹本　津太夫
久我之助　豐竹つばめ太夫
三味線　鶴澤綱造
同　豐澤仙糸
定高　豐竹　古靭太夫
雛鳥　竹本　南部太夫
三味線　鶴澤友次郎
同　野澤吉彌
琴　鶴澤福太郎

【解說】王朝時代の入鹿の暴政を背景にしたもので、武士の意地づくから、紀州背山の領主大判事清澄と、大和妹山の領主太宰の少貳國人の後室定高とが國境の吉野川を境にして互に反目して軋轢をつゞけてゐたが、清澄の伜久我之助は何時しか國人の遺子の雛鳥と相思の仲となつてゐた。處で當時國政を自由にしてゐた蘇我の入鹿は其權勢を恃んで雛鳥を後宮に迎へやうとし、其手段として久我之助に難題を言ひかけて自殺させると、雛鳥も入内を拒んで、久我之助に操を立てゝ母の手にかゝつて蕾の花をちらすといふ狂言で、親達の心も解け合ひ雛鳥の首が形見の爪琴に乘せられて吉野川の川瀬を渡つて久我之助の許へ輿入れするところなど固有藝術の獨壇上で、淨るりは元より歌舞伎でも兩床を使つて掛合で演ずる

竹本南部太夫さん

◇　◇

（前略）㊟入鹿大臣へ差上たる雛鳥が首、御檢使受取り下されと、呼はる聲を吹き送る、風の案内に大判事、歎きの袂改めて、衣紋繕ろひ徐々と、下立つ河邊の柳腰。娘の首を掻抱き。㊟大判事様、別して何にも申しませぬ御子息の御命は何卒と思ふた效もない、敢ない有様、お前様のお心も、推量致して居りまする。添ふに添はれぬ恨縁を、想ひ合ふたが互の因果、此方の娘も、そひたい〳〵と思ひしに

輿車ならぬ爪琴で首のお輿入り

放送は山の段

㊟余り不愍に存じます、せめて久我之助殿の息のある中に此の首を其方へ渡し申すが、娘を嫁入さす心。實に尤、嫁は大和、聟は紀の國妹背の山の中に落つる吉野の川の水盃、櫻の林の大島裏。目出たう祝言さしませうわい、それなら是迄の心も解けて㊟ハテ互にあひやけ同士

エ、忝ないと悦ぶも後の祭、ほんに背丈延びたる百を、何時迄も、子供の樣に思ふて暮すは親の例、甘やかした雛の道具、一人子を殺して何にせう、跡におく程の涙の種。㊟侍女共其一式、殘らず川へ流れ灌頂、未來へ送